

13
5
94

佐藤麟角居士著

救世百年眼

東京書林 森江出版

013567-000-8

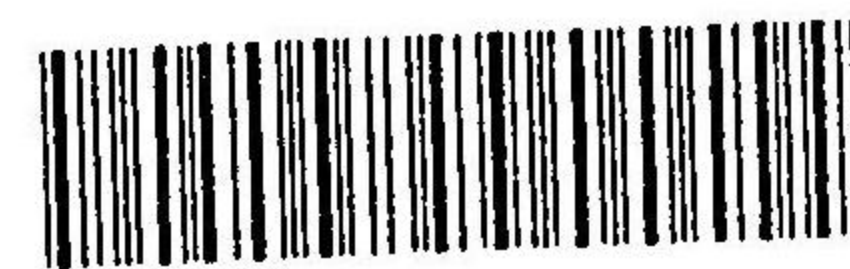
特16-330

救世百年眼

佐藤 麟角

M21

ABA-0034



救世百年眼緒言

余往時伊達自得翁に就て佛理の蘊奧を承

り一日翁余を戒めて曰く今より後急劇事に就くな

かれ存養省察以て他日を俟つべしと余豈敢て當ら

んや唯今の知己の言を回照すれば背汗も亦啻さら

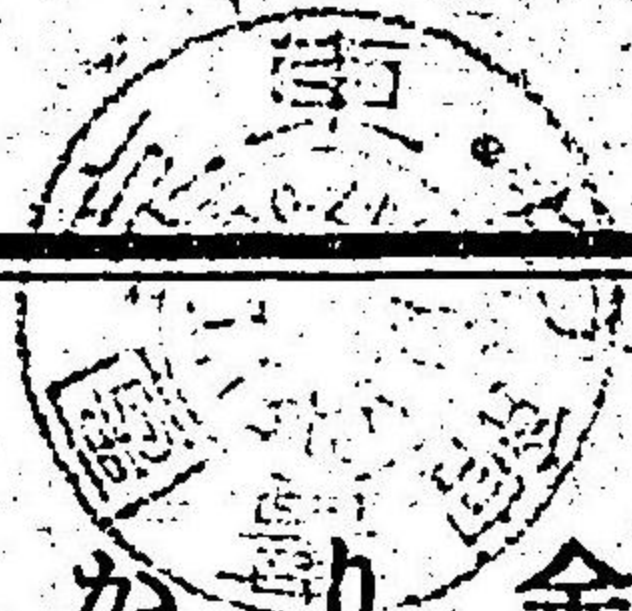
ざるあり亦嘗て敬宇先生に隨て西學の源を受るに

及んで屠裡便々として樂地あるを覺ゆ今や世上を

通觀するに佛那錯然人その指針に迷ふこれ筆鋒を

發揮して學教の源を叩くの時ならん然れども余や

商事多忙筆硯に親近するの暇なと偶ま微恙家に在



り論を裁きること左の如し題して百年眼と云唯恨む参考の書冊多く簿記牙籌の座右に散亂するのみ他日幸に閑暇を得は將にその缺を補はんを欲するなり或は曰百年眼の言妄よ過ぐるなきか先輩の臆を恐れきやと實に然り然れども余知己を百歳の後に俟つものなり

明治廿一年七月

著者識す

救世百年眼

世の懸隔を問はず人の賢愚を論せき苟も兩間に生存する人種は黃白如何の區域に論なく各その所信の宗教なかるべからず而してこの世界の廣き經論の多き何人か善くその眞理を説破して安心自立の教道を建立するや支那の老莊は淡泊虛玄を説てその説を擴張すれども未だ教主の目を付すべからず孔孟は忠信仁義を説て善く人を教ゆれども未だ教主の目と付すべからず諸子百家の流に追んで仁義の言滋す顯はれ博愛を以て仁となし篤行を以て義と釋せり然れども皆未だ教主の目を付すべからず猶太の耶穌は自ら神子と號し自ら救世主と唱へ末世の民に代てその罪を償ふと稱し上帝の民を愛するハ春日の萬物を發育せるが如し我の人を愛するは上帝の我を愛するが如しと謂ひ天地日月も上帝の造作するところ父母國土も上帝の造作するところ

一島地獄雷
日現今印
度婆羅門
新教之說
暗合此意

ろと謂ひ其敬愛の道を説くこと厚しと謂ふべし然れども人間の生存する所以の理に於て事物と眞理とを究極し安心の教を存するとなし
まゝ本然の理教を談ずるの語ありと雖ども學者をして切瑳せしむるの要義とする能はず故に耶蘇基督を以て世教の本主と爲すに足るも
未だ出世教の本主として教主の目を付すべからず
若夫れ敬愛仁義を以て世の教主とせらるかその教主も亦多し衣は寒暑を防ぎ食は饑渴を養ふ故に衣食の急なる敬愛仁義の後ならんや由是
言之衣食も亦これ教主ならん醫は病を知り藥は病を治る醫藥の功は
敬愛仁義の上に出づ故に醫藥も亦教主ならん如此なれば牛、馬、
亦これ教主と謂はざらんや「夫然り豈夫れ然らんや蓋し世の教主とは
人間心病の在所を知り三才の道を竭し實義の教を存し普く世人をし
て信を置に足らしむるの理由あるを以ての故なり

試みに耶蘇が所立に就てその一二を論せん靈魂不死を言が如き殆ん
と精妙に似たりと雖ども眞理の本分よりして之を論せれば未だ痒を
搔くの言語と云べからず何とならば靈魂を以て一確物の如しとして
不死と謂はゞ如何なる地を以て所住とせらるや如何なる形相をなして
生死往來するやそれ死は生に對するの辭にして死なくんば生も亦な
けん生もしなくんば焉ぞそれ死あらんや何爲ぞ靈魂は如々なりと謂
はざる何爲ぞ靈魂はその生なくその滅なくその増なくその減なしと
説かざるや而して靈魂身體共に天帝の援與なりとして言路を絶する
に至つては豈その言の撞着するのみならんや學者をして終に迷悟兩
般を決せしむるに由なきなり

三位一體の説の如き耶蘇にして始て得べし後世の人をしてこの地位

に至らしむるに於ては或はその補助の言語を假らざるを得ず何となれば上帝を以て物となし靈魂を以て物となさばその道や支節分離の道にして終ふ打成一片の時あるべからず豈同體一體の眞理に契當をばけんや故に境相の上よりして立言すれば上帝無形なりと雖ども然れども善く萬物化育の政令を行し感應道交をなすと云へり靈魂無相なりと雖ども然ども善く視聽言動の境となし心意識情の相をなすと謂はざるべからず而してその境相の實を求むるに終に得べからざるなり譬へは月の水上に印するが如しこの水この月共にその實體なきが如し乃ちこれ上帝や靈魂や無あるが如くよして有なり有なるが如くにして無なり而してその眞有なるもの有るとなし則指示して三位となし一如となすも亦妨げざるなり是れこれを眞空といひ眞有といふ此の如く説かば實理に契當して大過なきのみならず學者をして氷

然として疑團を破るに足れり然らずして三位は一體靈魂は不死のみ言説せば唯實理の邊際に轉迷せしむるの語となるのみならず靈魂身體の畛界を存立せざるを得ざるなり然らば則ち基督教の金科玉條とせるは眞理の語言に非らざしてたゞ一の一愛字あるのみたゞ一の一信字あるのみ將來傳道に與るもの眞理の本源を究極し教主未發の經義を發見しその所説を擴充せばその功豈に禹の下にあらんや抑も今日歐米諸邦典章文物みな宗教に淵源すと爲せり願ふにこれ宗教やは人心を快樂にし胸懷を開豁ならしめ形以上の實理を支配せるの徳あるが故に教の善否に論なく言の高卑に係はらき心をして萬機に通ずるの自在力を得せしむるが故ならん然れば則ち宗教の善美なるものはますます家國を以て福利を得せしめ人民を以て安樂を享けしむると豈その辨を俟んや

中村敬字
曰確言

往古來今聖經賢傳の上に就き東西の邦土に於て教主たるべきものを見らるに印度の釋迦文獨り人間の苦惱を悟りその所説誠に全世界の教主と仰ぎ美を千萬古に縱よするものあり

その所説に就て之を質せば十二因縁は以て次第生起の理を明し三世は以て生死流轉の理を示し四大は以て天地萬物の原素を總攝し四生は以て一切群靈の數を擧ぐ心識を煥發するに至ては五蘊皆空と説き八識流轉と談きその精微に至ては豈筆舌の能く及ぶ所ならんや而して父母報恩經には孝を説き涅槃には愛を説く孝愛慈悲佛亦最も主唱せり然り而して教に大小乗の區別あり頓漸顯密の差排あり華嚴阿含方等般若法華涅槃楞嚴金剛の諸經は皆その眞理を發揚し高尙の道理を證せしむる大乘の法典ならざるはなし其他大小乗經の如き汗牛充棟大數壹萬餘卷と云説法四十九年戒に五戒あり十善戒あり二百五十

一 獸雷曰該 羅無餘

戒ありその世教に關するもの亦多し地獄天堂の説因果實相の論みな以て人をして勸善懲惡ならしむるに足れり

され佛は一世の教主のみならず天人の師とするも敢てその不可を見ざるなり往昔佛教の東漸して支那に傳はるに及んでは強弩の發未だ弛へず有力者輩出し各その經義を主として宗旨を分列せ日本に再漸するに及んでは聖を去ると愈遠く宗義宗派の多端は以て亡羊の楫とされりこれ殆んど強弩の末魯縞を穿つと能はざると一般なり

それ現今の佛教をして漸次改進の途に就かしめ四分五列の跡を敎めて其財政の源を遼ふし眞俗二諦に於て超脱自在を得せしめば大乘の眞理を弘通する何ぞ其難さを見んやもし謂どころ信愛兩字の糟粕を認めて救世の宗教斯に盡るとせば伏羲の八卦周孔の易傳は實に救世の良書にして今世の宗教に超駕すると萬々ならん而て易の一書を以

て宗教に列するを聞ざる之余以爲く易の一書を以て修身正意の教となし經濟政事の翼となすも不可なからん何となれば孔子十翼に於て開物成務の四字を書し吉凶存亡坐而知之と曰玉へり轉玄てその義の深密なるに迫んでは原始反終故知死生之說といひ精氣爲物游魂爲變是故知鬼神之情狀といひ樂天知命故不憂安土敦乎仁故能愛と云の類みち救世の言に非ざるなし而して猶未だ宗教の一部に與からず豈に愛を説き神を敬するのみならんや幽遠精微實理自然の妙味を存し感應道交の奇特ある決して架空の說と謂ふべからず

今それ耶蘇のその教義の薄弱なる易の一書に及ばずその真諦の不完なる佛の小乘經にも齒すべからず而して歐洲諸邦藉て以て救世の教となす抑も亦その因るところ有るかさきの所謂三位や靈魂や耶蘇善くその蘊を漏すも後世所傳その要を得ざるよ由るか將傳道者の眼孔

小にして未だその奥を窺がはざるか復た深く思を存せざるべからざるなり

今や耶蘇教の藩圍全地球を一匝し十字軍の氣炎天地を衝突す佛教はた、亞細亞の一隅に孤立し婆羅門波斯の諸教に伍するが如きも千百年の後その果して歐洲大陸に西漸し佛耶地を換へて運動するとなきを知らんやその果して眞理の源は佛耶名字のために顯現せる能はざるなきを保せんや然らずんばた、今日流通宗教の現狀を認めて教義の善否を商量するに過ぎるなり成敗を以て人を論じその法理を議せば世間の業も之を快とせき豈況んや出世間業をや且つ言を食むもの曰く耶蘇宗教の國はその土地必ず昌盛よその人民必き活潑に文華駢々として底止するを知らず佛教の土地は國貧く兵弱く智識尙且つ上進せず未開發野に遠きと幾許もなしと是れ通じて今日の議論口實と

なれり然れども若し如此皮想の言を設けて宗教を論断せば佛耶共に
 その弊跡なきに非ず故に余はこれを政事の良否に根する者とするを
 當然の議論と思へり譬は我日本の人種を見よ七百年前覇府の興起せ
 ざる時代には人の軀幹偉大のもの多く七百年後覇府の威權甚だ強く
 束縛の制度大に行はれしより人心戰兢その結果竟に軀幹をして矮
 少ならしめ智識をして淺狹ならしむるに至れり苛政虎よりも烈しの
 言以て思ひ見るべし又家庭の嚴正に過るものを見せやその兒子果し
 て身體智識完全の域に進まざるか如しこれその政事の良否はその國
 の貧富を區別すべくその人民の智愚を分つべし決して答を宗教のみ
 に歸すべからず

それ宗教の宗教たる所以はその神の神たる所以の理を悟り迷倒の見
 を脱するを以て極所となきなり彼の釋迦文はたゞこの眞理を辨別し

一 獸雷曰確
 說

て人を教導するのみならずその教中の文字よ於ては ヒロソヒ一(理學)
 の如きあり首楞嚴是なりロヤッ(論理法)の如きあり因明俱舍唯識是
 なり政事經濟を論ずるものあり仁王經の如き是なり律法の原を論ず
 るものあり梵網經の如き是なり哲學の最上級を論ずるに似たるは金剛
 經の如きあり或は詩句の高妙なるものは香風吹萎華更雨新好者(法華
 城喻)の如き人者樂苦之始(阿含經)の類の如き實に妙絶文字にして杜子
 美も三舍を避くべし數理を論ずるものに至つてはその語句極て多し
 後々五百歳の豫言の如き亦その一之而してその説法の善巧方便なる
 善く人の根機に相應し精粗至らざる所なし佛を稱して世尊と謂ひ其
 辨を尊て廣長舌と謂ふ實に誣言に非るありその支流の八宗となり十
 宗となる教元の廣大なるを表するに足れりそれ偏小の假山は石花草
 木を排列すれども眞の風趣に乏し深山幽谷嶮崖絶壁の地に遊ばゞ溪

一 敬字曰妙
 妙妙

泉の潔冽たる喬木の鬱鬱たる紫蘭の郁々たる或は鼻を衝き目より上り
身心快適瀟洒たるもの多し眞理の源に游泳するもの亦たこれと異
ならず法見を存し非法見を存せば未だ假山のその趣味を盡さざるが
如く世間を破し出世間を存せざるは泰山に登て天下を小にし清風弄
月の樂み陶然たるものあるか如し

一獸雷曰好
譬喻

見よ草根木皮は均しく是れ草根木皮なり良醫これを用ゆれば病を治
す阿片蒙爾比根は均しくこれ阿片蒙爾比根なり庸醫これを用ゆれば
人を誤る今日泰西の耶蘇教は良醫の草根木皮を用ゆるが如く亞細亞
の佛教は庸醫の阿片蒙爾比根を使ふに異ならずたゞに用ひて人を誤
るのみならず併て亦自家を救済する能はきあゝ何ぞ其懸隔の甚だし
きや然りと雖も若し今日の哲學をして他日その奥に登らしめば必き
佛智を發見するならん今日の耶蘇教蔓延は他日或は佛種を傳播する

一柏樹曰眼
中眼

の良田地たるなきか余之れを孔子に聞く齊一變すれば魯に至り魯一
變すれば道に至ると今日の哲學はこれを齊に譬ふべく今日の耶蘇教
はこれを魯に比すべし齊魯一變して道に至るはそれ佛か然れば則ち
佛耶の徒豈その軒輊をさるに足らんや
それ佛と謂ひ耶と謂ふ同じくこれ天地間の善術なり同じくこれ千百
年の教迹なり遷動して止ざれば皆その堂に登るべし願ふに歐米諸洲
國廣く人多し大人君子あくんばあらず他日神光の赫燦たる佛智の圓
満なる或はその淵藪となるも計るべからず今より後余たゞ期す智徳
上進し百物利通し萬國共にその福利を享有し佛耶の名字を一掃し眞
理をして豁然貫通するの域に達せんを刮目して以てこれを俟つあ
るのみ

救世百年眼補遺

余この論を印行するに臨んで深く自ら戒慎し讀者の注意を促さるを得ず何とあれば世人余がこの論を讀んでその理致の淵底を窺ふの暇なく忽ち無神論に陥らんとするとは是なり

夫れ佛の慈悲孔子の仁耶蘇の愛共にその揆を同じふせり耶蘇の獨一神孔子の天佛の眞如その説くところ異なりと雖も淵源に溯れば同くこれ一道なりと言はざるを得然れども耶は譬ば門外よりその庭園の排置と家屋の結構とを概見して主公の面目を指摘するが如く靴を隔て、痒を搔くの憾を免かれ故に世人をして動もすれば妄信の念を起さしむ孔は主公に面接し親しく言語を交へその賢愚を見たるが如きも惜いかな接對の狀券と登階の路程とを指示せざる者、如したゞ佛のみ主公に握手を欣林笑語主となり伴となり珍膳美肴一とし

て具備せざるなし豈その接對の狀券を握り登階の路程を指示するのみならんや庭園の接置樓殿の構造歴々としてその眞景を顯はさるはなしこれ余か佛を以て獨出の教主と尊崇する所以之然れども今日世態の上に就て佛耶の二教を畧説せば佛の教は博物館に遊ぶが如く廣大深密に過て人その全體を窺ひ難し耶蘇の教は醇然無雜一酒一肴の腹を盈すが如し即ち天地を以て教の主本となし信愛を以て能所となし所能となすなり乃ちその化の人意に適し易くして普及する所以なり故に人の神と信し佛を念ずる漠然たるに似たりと雖もその名を存すればその實從て存するは理の然るべき所なるを以て亦深く責るに足らずたゞその顯理の一點に至つては聖人復た出るも必ず余が言を易へざるなり

もし佛耶宣敎者の上を評せば耶は實にその上首を占めたりと謂ばさ

前島密曰
此段の所
説白人の

るを得ず試に耶蘇宣教者の室に入てその言語を交へば暖然たる佳氣
來て吾が眉目を襲ふの情致あり且その人の如き勤勉勸誘誠に善く敬
愛の道を守てその教を翼賛するもの、如し佛の宣教者の如き善は則
ち善と雖も自ら亞細亞の習氣あるを免かれずこれ一は萬里の海外
も遠しとせず傳道のためにその身命をも惜まき捨財をも念とせぬ人
に接ざるは恰も神に對するが如く赤子を保んぬるが如きの一着より
して斯に至るなり佛の宣教者の如きその法施あるを知るも財施を行
はず自國に安心固着するも異邦の人を化するを善くせぬ人に接する
或はその傲慢ならざれば勃率に傾き易しふれ宗規宗制の下流を汲ん
で教主釋迦文の根本を照見せざるが致せるところなり
然れどもこの以後歐米の中に大豪雄生出し佛の正實理を首唱し廣長
舌を掀翻せばその説忽ち地を卷て五洲に波及すべし何となれば理學

手を假て
宗教を一
洗すと黃
人爲し得
ずして白
人これを
なま何ぞ
この理あ
らん均是
人也豈黃
白の別あ
らん而し
て黃種爲
し得ず白
人専らこ
れを爲す

にまれ哲學にまれ共にみな佛の正實理を發顯するの機具たらざるは
なくその人や大根大樞達して後止むの氣慨あるを以てあり余故に耶
蘇教の蔓延の佛種を傳播するの好田地なりといひ哲學の極度は佛智
を發見するといふ所以なり然れば今後亞細亞の教の地を拂て耶蘇教
と變ぜるともこれ釋迦文善巧方便を以て人間に生出し他力の小乘教
を敷演し亞細亞宗教の弊風を一洗し彌勒出世の大道場を全地球に設
置して教法維新の大神通を顯現するにあらざるや
又一步を進めて考思をなさば佛といひ耶といふも皆是れ假名なり天
といひ神といふも亦これ識心所造の名目たるに外ならず假名を破し
識心を認めざれば一大事の既も脚跟下に成就して盡大地はこれ神な
りこれ佛なり地を穿て水のあらざるなく海に入て鹽味を感せざるな
きが如し神と信ず佛と信ずるはその地位に至んため門札なりこれ

を忘れて別に天を求め神を詮索せば精神冥濛終に出期あるとなし聖
人こゝを以て人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中と曰玉へり或は又
盡大地は是れ病なり是藥なりと謂へりこの地位を明らかめざる故に森
羅萬衆は盡くこれ病根をなして識心ためにその森羅萬衆の奴隸とな
れり萬物皆備於我と徹底し而してその我なるもの消滅するの境に至
ればこれ藥病相ひ治すと云ものにて事々物々これ神なりこれ佛なり
神威佛光法爾として具らざるなし譬へば波として水にあらざるなく
水とて波瀾を生ぜざるなきが如し自家も就てこれを謂はば花を拈
するもこれ神事あり吾か手を啓き吾か足を伸ぶるもこれ佛事なり佛
豈邇きにあらざらんや神豈遠きに求めんや
若し人今後余がこの論よよつて眞理の火の如きを發見し事務の外に
宗教なく宗教を離れて事務なき意義を了解せば佛耶の理合は自ら會

心するのみならず神徳の廣大なる佛智の無量なるをも知り得べしこ
れを萬古の心胸を開拓すと謂ひこれを萬物主宰の人と謂ふなりこれ
余が天神地祇に報ずるの寸心を満足するのみならず疵瑕を論じ辨難
を試むる罪禍は地を拂て消滅するに至るべし

明治廿一年十二月二十日印刷

同廿一年十二月廿七日翻刻出板

定價金拾錢

東京府平民

發行者

森江佐七

麻布區飯倉町五丁目四
十四番地赤羽根橋北際

東京府平民

印刷者

桑原八郎次

京橋區築地一丁目十五
番地

各 地 賣 捌 所

東 京	西 京	全	全	全	全	全	全	全	全	大 坂	名 古 屋
三 倉 鐘 三 郎	出 雲 寺 文 次 郎	小 川 多 左 衛 門	澤 田 友 五 郎	藤 井 佐 兵 衛	永 田 調 兵 衛	大 谷 仁 兵 衛	西 村 七 兵 衛	西 村 九 良 右 衛 門	川 谷 卯 之 助	橋 本 德 兵 衛	梶 田 勘 助
全	越 後 長 岡	全	全 三 條	信 州 長 野	羽 後 橫 手	美 濃 泉 村	紀 州 高 野	陸 奥 八 戶	越 中 富 山	越 前 福 井	伊 勢 松 坂
三 浦 兼 助	目 黑 十 郎	松 田 周 平	西 村 六 平	西 澤 喜 太 郎	大 澤 忠 四 郎	高 木 盛 三	前 岡 久 五 郎	浦 山 政 吉	大 橋 甚 吾	酒 井 安 兵 衛	柏 屋 兵 輔